実社会の課題解決を参考に、自分なりの課題を設定！

「人がよりよく生きるとはどういうことか」というテーマで探究カリキュラムを編成。
2020年度は、「人生100年時代」というキーワードを生徒に提示し、100年の人生をどう生きるか、また、わたし達が生まれる前も人生を終えた後も存在する世界はどんな世界だといいのか、自分なりに考えさせる探究を実施した。

対象：2年生　280名
7クラス　普通科

■ 年間カリキュラム

●総合的な探究の時間（35時間）　●活用テーマ：導入、まち、伝統継承、共生
●学校テーマ：人がよりよく生きるとはどういうことか
・専門機関と関わりながら探究を進める『Future Vision』。2年生は、12のテーマから選択したグループ探究・個人探究を行う。

2年生　1学期　2学期　3学期
100年を創造するチカラ　個人探究『Future Vision』　学術祭

自分達の探究課題を発見・設定する前に、本教材を実施し、全体で「実社会の課題解決アプローチ」を学んだ。
テーマ「まち」では、まちの課題と実際に取り組まれている解決策を分析させ、一人一人が課題解決に向けた今後のプロセスに見通しをもつことができた。

活用のアドバイス

探究の指導のカギは、共通性と自立性。この教材は「基礎編と実践編」がまさにそれを実現させてくれます。共通で基礎がしっかり身についていれば、自分でどんどん探究していけます。「100年続くまち」という設定が、「じゃあ、自分の地域だったら…」と考えやすかったです。このアプローチがあったおかげで、生徒が探究を自分事として捉え、その後の自立した個人探究につながりました。

■ 探究エピソード紹介

実社会と協働して探究する『Future Vision』

行政・大学・企業・NPOなどの関係者から話を聞きながら、地域や世界の実情を調べ、自分なりの解をつくりだしていきます。課題意識をもっている人達との協力・協働が特徴です。
その成果は、学術祭（啓成高校の呼びかけで、北海道内４校が合同開催）で発表。北海道大学の先生などから、発表の内容、実施方法ともに高評価を得ました。

↑学術祭の様子

研究主任 村中先生から『探究』へのアドバイス！

自分なりの課題の設定には、「いろいろなテーマ・実社会」に触れさせることが重要

課題は生徒の課題意識が芽生えるタイミングで、生徒自身に設定させることが大切です。そのためには、「いろいろなテーマに触れさせる」ことが有効です。だからこそ、カリキュラムを外に開き、「社会の人と一緒に」考えていくことが大切です。
もちろん、この教材もその一つです。大人が、「今社会が抱えている課題に対してどれだけ真剣に解決に向けて取り組んでいるか」に触れることができます。これが、生徒の課題の設定、探究に与える影響はとても大きいと思います。

Q 北海道の生徒達にとって、「東京駅」や「羽田空港」といった題材は、どのように映ったようですか？

A もちろん、訪れたことがない生徒ばかり。教員も、事前に調べたり、映像を探すなど準備し関心を高めました。
でも、一番大切なのは「では、北海道だったら？」と投げかけること。本当に考えさせたい場面では、生徒に身近な題材に置き換えることが必要です。

スキル定着に向けて活用！100年先の未来を考える『未来計画』につなげる

2018年度より、総合的な探究の時間を『交野クロスプロジェクト』として先行実施。
①学力向上プロジェクト、②キャリアプロジェクト、③探究活動の３つに重点をおき、
「自律、主体的に探究していく」生徒を育てることをめざしている。
「具体的な事例を通して学べる」ことから、本教材を取り入れたカリキュラムを編成し、2020年度実施した。

対象：1年生　281名 7クラス
　　2年生　275名 7クラス
　　普通科

■ 年間カリキュラム

●総合的な探究の時間（35時間）　●活用テーマ：導入、まち、伝統継承、共生
● 1 学期にキャリア、2 学期はスキルトレーニングを行い、次に本教材を実施。その後グループ探究を行う。

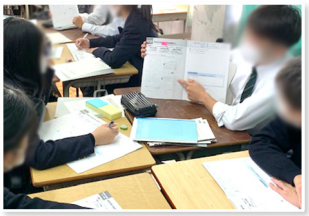
1・2年	1学期	2学期		3学期
	『キャリアプロジェクト』	スキルトレーニング	スキル定着	グループ探究『未来計画』

100年を創造するチカラ

スキルトレーニングの後に本教材を実施。具体的な課題解決を題材に、スキルを「定着」させることをねらった。

活用のアドバイス

スキルトレーニングでは、「机上の題材に対して、ただ練習をしている」ようで、活発さがありませんでした。他の教材は、スキルはたくさん載っているが、「それをどうやって使うのか」という具体が無いものが多いです。この教材は、**リアルな題材が、映像やスライドで準備され、その中にスキルを活用する場面がある**から、生徒がのってくるんだと思います！



■ 探究エピソード紹介

「未来」を考える

本教材で手応えを感じて、進路指導部の２人の教員が構想をしたのが『未来計画』。
生徒の自由な発想を尊重し、「未来の〇〇」というテーマでグループ探究を行った。成果発表の場は、1・2年生合同のポスターセッション。校舎を広く使って、130の発表が校舎内に掲示された。

1年生探究担当 岡田純輝先生

「100年先の未来」を考える導入授業、携帯電話を考える授業では、「無くなる？」などの意見も出ました。生徒の自由な発想を大切に話し合わせることで、**一人一人が自分事として未来を考える**ことができました。この授業があったからこそ、『未来計画』につながりました。初めての単元でしたが、「未来のゲーム」「未来のメイク」など、本当に自由な発想で、これまで**できたらいいなと思っていたねらいどおりの探究**をさせることができました！

進路指導部長 塚本翼先生から『探究』へのアドバイス！

新学習指導要領は、教員にとっても、まさに「探究」。まずはチャレンジ！

よかったのは、**探究教材体験ワークショップ**。まさに「教員向けの探究についての研修」でした。2020年度、初めての挑戦となった『未来計画』も、この説明会で、それぞれの先生が探究について具体的なイメージをもつことができたからこそ。企画したのは若手教員２人。この教材の活用と授業への挑戦をきっかけに、交野高校の**探究が一気に進展**しました。
探究で大切なのは、生徒が実行したかどうかだと思います。そのためには、わたし達教員も、失敗をおそれずやってみる、教員にとっての探究が大切だと思います。

↑『未来計画』のポスターセッションの様子

実地研修（修学旅行）の代わりに！実社会の課題解決を実感させる

生き方をテーマにしたキャリア教育として３年間のカリキュラムを編成。例年の実地研修（沖縄修学旅行）の代替として、本教材を活用して、課題解決の意義を捉えさせた。

対象：２年生　160名
4クラス　普通科

■ 年間カリキュラム

●総合的な探究の時間（35時間）　●活用テーマ：導入、伝統継承、まとめ
●学校テーマ：キャリア『生き方我が道～自分の生き方ぐらい、自分で決めてやる～』※３年間を通して、自分の生き方を探究。

2年生	1学期	2学期	3学期
	SDGs講座	ゼミ探究（14のゼミ）	

100年を創造するチカラ

最初にSDGsを学び、社会の問題に気づかせた。２学期からのゼミ『生き方我が道』の前に、本教材を実施。

例年では、沖縄実地研修での異文化体験があるからこそ、ゼミでの探究につながります。今年はそれができなかったので、この教材で実社会の課題解決の意義を捉えさせました。
例年は、単純な調べ学習で終わってしまう生徒が少なくなかったのですが、今年は、課題解決について考える生徒が多かったのが印象的です。
「探究はなかなか結論が出るものではなく、繰り返しやっていくものなんだ」という意識付けにもなりました。

おススメ！

映像教材がすごい！「世の中って、こんな課題解決が行われているんだ！」というスケールの大きな探究が見てとれます。「東京や東北の話だ」と、他人事にならないように、生徒達の身近な地域や身の回りにつないでいくことがポイントです。

■ 探究エピソード紹介

生き方の探究に向けて視野を広げる

『生き方我が道～自分の生き方ぐらい、自分で決めてやる～』は、本校の伝統的な探究です。３年かけて「進んで調べ、課題を見つけ、結論を出し」、自分が大学で研究したいこと・職業でやっていきたいことを明確にします。
自分の興味があるもの、目先のこと、自分の経験の範囲でしか考えることができなかった生徒が、この教材で、社会ではどんなことがされているのか、企業がどんな活躍をしているのかを捉えて、視野を広げることができました。

研究主任 工藤先生から『探究』へのアドバイス！

探究活動が、生徒がキャリアを描くきっかけになる

卒業時の生徒からは「探究をやってよかった」という声がとても多く聞かれます。自分の興味・関心のあることにはとても主体的です。探究していくにつれ、もっとやりたいことが見つかり、人生の目標につながった時、進路希望や志望する大学が見え始めます。「行きたい大学を調べる」ことから始まるキャリア教育とは逆の発想です。探究の指導は、生徒が自分でキャリアを切り拓く支援をすることだと考えています。

Q 小グループでの探究指導のコツはありますか？

A わたしのゼミでは、毎回の発表があり、疑問点や課題を話し合います。その解決策を、本人が次週までに考えてくる、という方法です。「グループで協力」ではなく、「高め合う仲間」になるような雰囲気づくりも重要です。

探究を導入した新カリキュラム。1年生のスキル習得で活用！

これまでの進学・進路中心の「総合的な学習の時間」から、探究へシフトしたいという考えから、新カリキュラムをデザイン。1年生のスキル習得場面で、本教材を活用。

対象：1年生　180名
5クラス　普通科

■ 年間カリキュラム

●総合的な探究の時間（35時間）　●活用テーマ：導入、まち、伝統継承、共生
●学校テーマ：地方創生。市役所と連携し、阿波市の未来への提言を行う。

1年生	1学期	2学期	3学期
	共通講義『〇〇〇について』※各教員の専門分野から学びを深める	探究のスキル習得 100年を創造するチカラ	『阿波市の未来について』

1年生の探究の導入で、本教材を実施。探究のプロセスを経験させながら、スキルを身につけさせた。

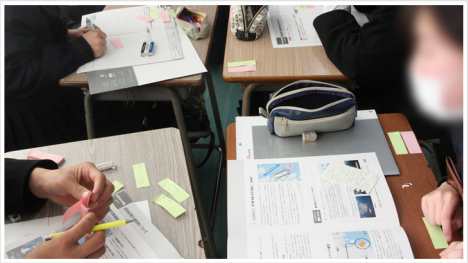
活用のアドバイス

ストーリーの中で、自然にマインドマップ、KJ法が使えるようになっていたから、授業がしやすかったです。
具体的な課題解決が事例なので、生徒の探究への関心も高まります。探究の導入・1年生にぴったりです。

■ 探究エピソード紹介

先生が語る「正解のない答えを考える授業の面白さ」

最初は答えがないことを嫌がり、あまり積極的でなかった生徒が、自分の考えでいいんだという自信をもって話すようになりました。
毎授業、生徒のいろいろな意見を聞くのが本当に楽しみでした。
他の学習場面でも、メモや付箋を利用して、自分で書き込みをする生徒が目立つようになったのに驚いています。



生徒が語る「探究ってすごい！」

探究のグループ活動では、人の意見を聞くと、自分の考えが発展していくのがわかります。
考えるときは、コミュニケーションが大事だと思うようになりました。

最初、「未来」と聞いて、クラスのみんなも反応が薄かったけど、今は、新入生のために、掃除をすみずみまでさぼらずやったり、後に続く人達のために行動できるようになったのです。
自分達でも、未来を考え、変えられると思います。

研究主任 濱田先生から『探究』へのアドバイス！

身の回りの課題に気づかせる「投げかけ」

元来、生徒達は様々な視点をもっているので、それを大事にして、そこから「自分で探究の課題」を見つける力をつけさせることが大切です。
小さな課題でもいい。不便、おかしいという気づきから課題を見つけてほしい。
成果物をよりよくしようという固定概念にとらわれすぎると、探究の最初から手取り足取り指導してしまいがちです。揺さぶる言葉がけで、生徒達に考え直すステップを踏ませる。その教員の「投げかけ」が指導のポイントです。

おススメ！

この教材は、探究を深める「投げかけ」のヒントも指導案に載っているし、指導案に沿って授業を展開していくことで、先生方も「課題に気づかせる」支援の仕方を学ぶこともできると思います！

地域連携探究に向けて、1年生で基礎編、2年生で実践編を活用

2020年度新たに、地域の課題解決型の探究を中心とした3年間のカリキュラムを構想。
1年生では、探究の基礎を身につけるために、本教材の基礎編を活用した。

対象：1年生 20名
資源動物科

■ 年間カリキュラム

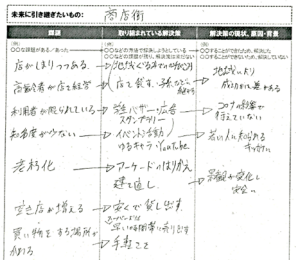
●総合実習 課外（75時間）　●活用テーマ：導入、まち、伝統継承、まとめ
●学校テーマ：地域課題解決への参画　※3年間を通して、リアルな地域課題の解決を通じて探究する力を育成する。

1年生	1学期	2学期	3学期
	農業の基礎を学ぶ	2・3年生と合同で地域の人達と交流	探究の基礎を身につける 100年を創造するチカラ

2年生は、地域と連携した課題解決型の探究を予定しており、探究の基礎を身につけるために1年生の年度末に実施した。

活用のアドバイス

テーマ「伝統継承」で、東京駅を題材に「課題と解決策を表にする」練習ができたことがすごく有効でした。この手法を活用した「自分が未来に引き継ぎたいもの」を表にするワークでは、「有機栽培・無農薬栽培・合鴨農法・商店街」など、思い思いの課題を設定して考えていました。これは、2年次の地域探究テーマにつながります。自身の興味・関心から探究課題が設定できるのはとても重要です。
来年度、どのような成果となって現れるのか、非常に楽しみです。



■ 探究エピソード紹介

自分の興味・関心を大切に、地域の課題解決を「自分なりに」考える

地域にはさまざまな課題があり、その解決に向けて取り組む、まさに探究をしている人達がたくさんいます。本校では、その人達と連携して地域活性化に取り組む「みっかつ（美原地域活性化）プロジェクト」を構想し、2021年度の探究として取り組む予定です。連携先としては、生産者（古代米の若手農家）、販売店（地産地消の飲食店）、デザイナー（絵画教室）の3つ。生徒はこの中から選んで協働していくので、この教材で、自分は「どんなことに興味があるのか」「地域のどんな課題を解決したいのか」を考えられることは、とても価値ある学びになると考えています。

総合環境専攻主任 中村先生から『探究』へのアドバイス！

地域で主体的な探究にするためには、興味・関心とつながるテーマが重要

「やらされ感」をもった校外活動では、探究の質は高まりません。
主体的な探究には、興味・関心をもてる活動にすることが重要です。
最初から「地域の中で、興味があるテーマは？」と問うても自分事になりづらいものです。反対に「自分の好きなことからつながるテーマは？」と問うと、生徒は、自分の興味・関心と学習をつなぎ、主体的な探究が始まっていきます。

Q 生徒の興味・関心を広げるためにはどうすればいいですか？

A 探究は、正解が一つではない問題を考えることが特徴です。だからこそ、自分なりの正解を見つけさせる機会にもなります。例えば、自分の考えをワークシートにまとめた後、グループで交流させ、気づいたことをメモさせます。複数の視点からの考えを知ったうえで、自分なりの考えを再考する習慣をつけることで、ものごとへの興味・関心が広がっていきます。

実社会の課題解決を参考に、「自分なりの問い」を立てる

２年間をかけて、自分で「問い」を立て、それを探究していくカリキュラム。１年次は、１年間をかけて「自分なりの問い」を立てる。よりよい「問い」を考えるために、本教材を活用し、実社会の課題解決を参考にさせた。２年次では、その「問い」に対して実践的に探究を深めていく。

対象：1年生　320名
8クラス　普通科

■ 年間カリキュラム

●総合的な探究の時間（35時間）　●活用テーマ：導入、まち、伝統継承、共生、まとめ
●学校テーマ：問いを立てる
・２年次で年間を通して探究する個人探究に向けた、「自分なりの問い」を立てる。

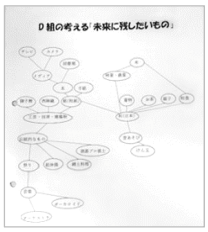
1年生

1学期	2学期	3学期
探究とは	100年を創造するチカラ	個人探究の「問いを立てる」

本教材を活用して、「探究とはどのようなものか」具体的な実社会の課題解決を参考にさせた。当たり前のように過ごす日常生活には、実は課題解決があったこと、身近なところにも課題があることなどに気づかせ、身の回りに目を向けさせた。その後、興味・関心のあることがらについて自分で資料を探させ、「自分なりの問い」を立てる活動に入った。

活用のアドバイス

テーマ「伝統継承」には、「自分の地域の引き継ぎたいもの」について考えるチャレンジがあり、それを夏休みの宿題として取り組ませました。初めての探究での「自分なりに調べる」課題でしたが、授業で「やり方」を指導していたので、例年以上に内容の濃く、バラエティに富んだ成果物が集まりました。夏休み後に、学年で共有を行うことで、「様々な身近な課題」があることをとらえなおす機会にもつながりました。



■ 探究エピソード紹介

実社会の課題に気づかせるために…SDGs

「よりよい問い」を考えさせるためには、実社会の現実に直面させたり、課題解決の「今」を知ることが欠かせません。本教材の活用後には、中高生新聞を提示したり、「SDGsのキーワードで関連記事・書籍を検索できるシステム」を活用させたりして、世界が目指す共通のゴールをとらえ、その中で自分がどんなことに興味・関心があるのかを考えさせました。

↑大学教授による講演会の様子

探究担当 石田先生から『探究』へのアドバイス！

探究の時間に指導したいことの究極は、「自分で問いを立てる力」を身に付けさせること

「言われたことはきちんとやる」けれども「自分で問題意識をもってやる」生徒は少ないと感じています。つまり、「調べる」のは得意だけれども「深める」が得意ではない。このような生徒たちに、「へぇ」で終わるのではなく、自分で考える、つまり「問い」を立てる力を付けさせたい。そのためには、「そういう考え方があるのか」と実社会に触れさせるとともに、「自分だったらどう考えるか」という経験を積ませることが必要です。これは、探究の時間だからこそ指導できることだと考えています。
またこのように、身近な問題や実社会の課題に対して「自分はどう考えるか」を深めていくことは、「自分の生き方を考える」ことにつながると考えています。

↑大学入試対策で活用した本教材で学んだ「考え方」

沖縄の自然遺産を護る「わたしたちのアクションプラン」

「世界自然遺産に指定されることは、沖縄にとって、本当にハッピーなことか？」
「それを担う私たちにとって、どのような護り方がベストか？」
生徒が自分事として考えたアイデアを、訪れる世界中の人たちに発信。

対象：1年生　118名
3クラス
フロンティアコース

■ 年間カリキュラム

●総合的な探究の時間（35時間）　●活用テーマ：導入、まち、伝統継承、共生、まとめ
●学校テーマ：わたしたちは、世界自然遺産をどのように護るのがベストか
・自分たちの地域が誇る世界遺産に対して、どのようにかかわっていくのかを１年間を通して考える。

1年生

1学期	2学期	3学期
100年を創造するチカラ	フィールドワーク	発信

本教材を活用し、沖縄の自然遺産について「自分たちにとっての『伝統継承』」「訪れる様々な人たちと交流する『まち』」「自然・文化との『共生』」という視点から考えさせた。その後、フィールドワークを通して自分なりのプランを考え、２月に沖縄美ら海水族館で訪れる多くの人たちにアイデアを発信した。

活用のアドバイス

沖縄には「駅」がない。しかし、「多くの人たちが集い・交流する」という見方をすれば、「私たち沖縄の人と、訪れる国内外の人がクロスする場所」として考える「よい題材」にすることができます。同様に他のテーマも「様々な視点を獲得させる」よう活用したことで、「ICTをかけ合わせ、二次元バーコードでゲームを提供する」など、多様なアクションプランのアイデアにつながりました。

■ 探究エピソード紹介

「支援者システム」によるグループ編成

生徒一人一人の探究心の尊重と、現実的な運用面でのグループ化にはジレンマがあります。そこで有効なのが、「自分はこう考える」というプレゼンテーションをさせ、それに対して「これだったら支援したい」と考える生徒でグループをつくる「支援者システム」です。志を一つにしたグループ探究では、支援者のアイデアもプランに入っていくことが多く、充実したグループ探究が実現します。

↑オンラインで支援を求めるグループのプレゼンを聞く様子

研究主任 國吉先生から『探究』へのアドバイス！

とにかく「考え抜く」。そのために必要なのが「自分の思考を言語化」させること。

探究とは、「考えること」だと思います。今の生徒たちは「output、生み出す」のが苦手。主張したいこと・やりたいことが伝えられない。その原因には「論理的に考える」訓練が不足していることがあると考えています。しかし、それが求められるのがこれからの時代。探究の時間では、とにかく「考え抜く」ことを繰り返して、それを鍛えていきたいと思っています。そのためには、「自分の思考を通して言語化させる」ことを徹底的に繰り返しています。
また生徒たちには、探究に取り組む際に「自分がどういう立場として、社会で活躍したいのか。生業としたいのか」を意識させることを大切にしています。このように「考え抜かせる」ことが、グローバルな世界で戦える素地をつくることにつながると考えています。